

経営実践見聞録

最近の幼稚園バス事情

看板消え、無印、色彩、デザインが主流

環境問題へのメッセージ発信も



「今日はいいお天気だ。森に行って作って遊ぼう」。そんな臨機応変の園外活動ができるのも園バスがあるおかげ。

「走る広告塔」と呼ばれた時期も

私立幼稚園とバスは深い関係にある。多くの幼稚園が利用する理由は、①毎日の通園(送迎)を安全に行うため、②公園や農園での園外保育を円滑に行うため、③入園先を決める親の選択肢を広げるため、この三つである。そしてこれが私立幼稚園の経営を支え、個性化に貢献してきた。

筆者が住む町(千葉市花見川区幕張本郷)は人口2万余。設備充実の産科病院が三つもある子どもの多い地域だが、幼稚園がひとつもない不思議な地域でもある。そのかわり近隣市区から園バスがたくさん乗り入れてくるので、逆にこの町の親は多くの幼稚園の中から自分に合った園を選ぶことができる。

一方で園バスは「園児争奪の道具」と見られてきた側面も否定できない。特に一時期、車体に園名を大きく書いたり園児募集ポスターを貼ったりする傾向があり、「走る広告塔」と揶揄されることもあった。また子ども達を夢の世界に誘うSL型や猫型のバスも「客寄せ効果」と見られがちだった。そうしたイメージは今も少なからず引きずっている。

しかし10年ほど前から様相が変わってきた。質素に実用に徹する、社会にメッセージを発信する、あるいはもっと素朴に色彩やデザイン性を感じてもらおう、そんな傾向がはっきりしてきた。その実際をいくつか紹介しよう。

「ゴミのポイ捨てやめよう」を訴え

変化を最初に感じたのは、15年前、北海道函館市・ききょう幼稚園(川村兼悦郎理事長&園長)のバスに出会ったときだ。理事長がみずから運転するバスの両側には「ゴミのポイ捨てやめよう!僕たち私たちの街をきれいにしましょう」と大きく書いてあった。



北海道・ききょう幼稚園のバス。今は園庭の列車物語に合わせたおとぎ話だが、以前は「ゴミのポイ捨てやめよう」のメッセージで注目された。



ミニバスにはメッセージが残っているが「ゴミのポイ捨て」に比べるとインパクトは弱い。



愛知県・鳴海ヶ丘幼稚園の天然ガスバス。枝葉の絵柄でCO2削減と樹木の大切さを呼びかけている。

同園は開園から10年もたたないうちに経営が行き詰まり、後を引き継いだ会社社長(現理事長)はまず最初に中古のバスを1台買ってきて送迎と園外保育に使い始めた。塗装し直したバスに何かお化粧をと思ったときに、この言葉が浮かんだという。幼稚園周辺の道路脇にゴミが散乱していたからだ。

そのメッセージを実現しようと、同園の職員は時には園児や保護者の協力も得て地域のゴミ拾い活動に精を出した。そうした活動の成果もあって、同園に対する地域の注目度が徐々に高まり経営は安定した。

残念ながらその中古バスはすでに廃車となり、同園の現在のバスにはおとぎ話の主人公が描かれている。これは園庭に何両も設置されている JR 車両(かつて青函トンネルを走っていた列車)に桃太郎や一寸法師の物語が描かれているので、ファンタジーの統一性をはかっているからだ。

わずかにミニバスの車体にメッセージが残っているが「ゴミのポイ捨て……」のような単純明快さはない。今も卒園児の保護者らから「理事長先生、あのゴミのポイ捨てバスは良かったわね」と言われるという。それだけ強い印象を与えたということだろう。

こうした環境問題のメッセージを発信する園バスは増えている。そのひとつが愛知県名古屋市・鳴海ヶ丘幼稚園(岡田勝彦理事長&園長)。ご覧のとおり二酸化炭素を吸収する枝葉が描かれていて、CO2を出さない日常生活を心がけることと緑の大切さの両面を人々に訴えている。毎日乗る子ども達にもその願いはきっと染みこんでいこう。

もちろんこのバスはCO2排出の少ない天然ガス使用車で、そのことも車体にも書かれている。そのほか同園は太陽光発電をしており、また「もったいない婆さん」をシンボルにしたモノを無駄にしない運動も行っている。そうした徹底した環境運動への取り組みがあるから、バスのメッセージにも重みがある。

園名無用の無印良品バス

もうひとつの傾向は園名もメッセージもない無印バスだ。写真は栃木県下野市・むつみ愛泉幼稚園(小倉睦美理事長&園長)のバスだが、同園は「サンタハウス」「日本屈指の和太鼓チーム」「元旦マラソン」「油